

第五高等学校外国人教師履歴

明治中期より昭和前期までの熊本における高等教育、とくに外国語教育においては、第五高等学校及びその前身の第五高等中学校が主要な役割を担ったが、これらの教育機関で、いわゆる御雇教師・講師として英語・ドイツ語・ラテン語等を講じてこの方面の研究・教育に多大の寄与をした外国人教師の功績も忘れてはならない。この意味で本稿は、彼ら外国人教師全員の履歴を通覧できるように編纂したものである。資料は主として熊本大学総合研究資料館所蔵の関係文書に拠ったが、ほかに後掲の諸文献をも参照し、記述内容を補った。

資料館には膨大な量の五高関係史料が所蔵され、その中には勿論、教員の履歴に関するものも含まれている。しかし、日本人教師については各自の履歴書を綴じた厚冊の『職員履歴』2巻が残されているが、外国人教師についてはそのようなまとまった文書は存在しない。彼らの履歴書は各年度の『職員進退』及び『職員拝命転免通知簿』に随時に綴じ込まれているので、これらを丹念に調査しなければならない。『統計報告』には年俸その他についての表示が見られる。

さて、履歴書は通常、傭外国人教師としての採用、講師依頼、叙勲等に際して作成されたが、記載量はわずか数行のものから詳細なものまで様々である。形態は訳文だけのものが多いが、それに原文を添えている場合もある。なお、関連史料として、当該外国人教師と校長との間で交わされた契約書がある。

さて、本稿に記した履歴は主として上述の資料に拠ったが——ただし原文そのままではない——さらに加えて、下記の諸文献をも参照・引用することにより、内容を補足した。

参考文献

『龍南会雑誌』『龍南』（第五高等学校校友会）

『五高五十年史』（昭和12年）

『五高七十年史』（昭和32年）

『五高同窓会会報』

『第五高等学校一覽』

『第五高等中学校一覽』

『龍南回顧』（昭和42年）

『五高同窓会会員名簿』

『九州学院七十年史』（昭和56年）

『名古屋大学医学部五十年史』（昭和36年）

『英語教育史資料』第5巻（昭和55年）

『英語青年』

Fr. Wenckstern : A Biograhly of Japanese Empire

Oskar Nachod : Biographie von Japan

Neue Deutsche Biographie Bd. 9

『東京高等商業学校一覧』

『陸軍中央幼年学校一覧』

『熊本陸軍幼年学校一覧』

『ひろの』第12号（ドイツ語・文学振興会、昭和47年）

Toshinori Kanokogi : Eine japanische Stadt und ihre Deutschen. In : Begegnungen (hrsg. v. H. Mehl 1977)

『気質季報』（ウイルヘルム・グンデルト博士生誕百年記念号 昭和55年秋季号）

『外国人雇傭雑件——高等学校1部』（外務省外交史料館蔵）

拙稿「『大日本書史』編者ヴェンクシュテルン」（『書誌索引展望』第8巻第2号、昭和59年）

拙稿「エルドマンズデルフェルと五高不敬事件」（『明治村通信』181、昭和60年7月）

「フリードリヒ・グライル履歴書」（一橋大学蔵）

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）についてはすでに多数の文献があり、また新事実の発見もないので、改めて採り上げる要を見ないのであるが、本稿の性質上、省くわけにはゆかないので収録した。H・H・ワラーとL・マイヤーについては履歴書を見出し得なかったため、関連事項を録しておいた。

人物掲載は五高着任順とし、各項目には、国籍・名前・原綴フルネーム・担当科目・五高雇傭期間の順に記した。

最後に肖像写真の依拠資料及び提供者・機関名を挙げておきたい。

『帝国文学』（小泉八雲記念号、明治37年）『龍南回顧』『気質季報』（ウイルヘルム・グンデルト博士生誕百年記念号）『九州学院七十年史』熊本大学総合研究資料館 富重写真館 朝日新聞社 古荘哲夫氏

英領カナダ国人 クラムミー Eber Crummy 英語 1888. 5. 8~1891. 11. 8

1862年（文久2年）5月15日、カナダのブロックヴィルに生まれた。長じてヴィクトリア大学に学び、文学士 Bachelor of Arts 及び理学士 Bachelor of Science の学士号を取得。元宣教師。妻の姓名はライザル・クラムミー。文部省専門学務局長浜尾新の紹介により招聘され、雇入期間は明治21年5月8日より同24年11月8日までであった。月俸金200円を給され、当時、熊本県熊本区桜井町に住んだ。藤本充安（明25卒）は次のように回想している。「我々の時代には西洋人の先生は仲々珍らしく、大に興味を以て先生を迎へたり。五高のクラムミー先生は実に其人なり。先生春秋に富み、若夫婦にて来朝、頗る快濶にして無邪気の様に見受けたり。故を以て熊本名物の兎狩りには別誂らへの大わらじを穿ちて参加し喜び勇めり。軀幹長大にして、掌の大なる事我々の二倍位あるかと思はるゝ程なり。其大掌にて我々に握手を為したり、又野球にも参加して米国流最新の投げ方を示したりして、仲々愛嬌にも富みたり。我々に英語を教授さるゝに至りては、頗る叮嚀親切なり。講読本は『サイラス、マナー』なりしが我々は全部に亘り充分の興味を感ずるに至らざるものありしが、先生は妙所に至れば手真似容貌を以て、愉快に教示せらる。時には話頭、先生の御国自慢も時々発露する事あり。先生一日話題

を日本の楽器に及ぼして曰く、日本の楽器は充分に進歩して居らず、到底西洋楽器の優秀に及ばず、従て音楽も欧米に及ばず云々と、説き聞かせらる余は先生を敬愛して居る時代であるから、決して無暗に楯突く様な考へではないが、何だか先生の説に首肯するを得ざるもの胸奥に存す。」(『五高同窓会会報』2号、昭和6年)。五高辞職後クラムミーは、明治24年11月、熊本を去って越中富山へ赴いたというが、その後の消息は不明である。

英国人 ハーン Lafcadio Hearn 英語・ラテン語 1891. 11. 9~1894. 12. 30



1850年(嘉永3年)6月27日ギリシャの西北方イオニア海上のLeucas島に生まれた。父はアイルランド人でギリシャ駐在の軍医、母はギリシャ人といわれている。6歳の頃父母は離婚した。それから富有な大叔母の許に養われ、イギリスとフランスとで教育を受けた。英国の学校生活中、怪我をして左眼を失明した。1869年(明治2年)、19歳のとき渡米、初めニューヨーク、ついでシンシナーティに赴き、新聞記者となった。8年後、ニューオルリンズに移り、そこの大新聞タイムス・デモクラットの文学部主筆となり、約10年の滞在の間に、翻訳・創作・評論を発表し、文名ようやく高くなった。1889年(明治22年)の春、40歳のとき、Harper's Magazineの通信員としてかねて興味をもっていた日本に来た。一時的な滞在のつもりであったが、日本文化の意外に多様で深いことを知り、ゆっくり日本研究をやってみようかと決意し、同年9月出雲松江中学校英語教師となり、小泉節子と結婚、『知られざる日本の面影』Glimpses of Unfamiliar Japan(1894)を書いた。明治24年11月、第五高等中学校に転任した。前任者イバール・クラムミーの代員として、英語とラテン語を担当した。月俸2百円を給された。木下順二の「小泉八雲先生と五高」(『五高同窓会会報』第8号、昭和10年)より熊本時代の年譜を抄録しておく。

明治24年

- 11月15日 松江出発
- 11月19日夕 熊本着、不知火旅館(研屋支店)に投宿、数日後市内手取本町34番地へ寓居。
- 11月21日 九州日々新聞にハーン来熊の記事載る
- 11月24日 五高正式に就任

明治25年

- 4月上旬 大宰府、博多へ旅行
- 5月20日発行の『龍南会雑誌』第7号に「りゅーけでを、へるん氏」として、「北米出版の一書」にあるハーン伝を抄訳して掲載。
- 7月末より8月末にかけて博多、神戸、京都、奈良、門司、境、隠岐、美保関、福山、尾の道に遊ぶ。
- 11月初旬 市内外坪井西堀町35(通称西外坪井35)に輯居。

明治26年

- 4月 博多に遊ぶ。

5月13日 新町忘吾会合における秋月胤永先生古稀祝宴に祝辞を贈る。

7月20日、21日 単身長崎へ旅行。この旅により「夏の日の夢」(「東の国から」所収)が生まれた。

10月10日 五高創立記念日の運動会を見物。

明治27年

1月27日 午後一時半より五高瑞邦館における龍南会主催の演説会に「極東の将来」という講演を行う。(これは翌2月7日発行『龍南会雑誌』第23号に掲載された)

3月9日 同日から10日朝へかけて、明治天皇銀婚式記念祝典及び祝宴に参列。

4月上旬 讃岐金比羅に参詣。

7月中旬より8月上旬へかけて上京、横浜、大津等を廻遊。

10月23日、24日、26日、29日、30日の5回にわたり、大里猪熊による前記「極東の将来」の訳が、九州日々新聞に発表された。但し題は「東亜之未来」と訳された。

11月 熊本を去り、神戸クロニクルに入社。

1895年(明治28年)帰化して小泉八雲と名のつた。1896年『心』Kokoro、翌年 Gleanings from Buddha Fields (1897) を出版。1896年(明治29年)9月東京大学文学部講師に招かれ、東京に移住した。ここで7年間にわたって英文学を講じ、学生に大きな影響を与えた。明治36年3月辞職、翌年4月から早稲田大学講師となったが、9月26日、狭心症のため、西大久保の家で死去した。

ハーンは偉大な日本紹介者で、著書には前記の他に『日本雑録』A Japanese Miscellany (1901)、『日本お伽噺』Japanese Fairy tales (1902)、『怪談』Kwaidan (1904)、『日本』Japan: An Attempt at Interpretation (1904) などがあり、第一書房版『小泉八雲全集』全18巻(1926~28)にほぼ全訳されている。

おびただしい数の研究文献があるが、速川和男編「日本におけるラフカディオ・ハーン資料年表」(1)(2)(3)(4)(『比較文学』16巻〔昭和48〕、18巻〔昭和50〕、21巻〔昭和53〕24巻〔昭和56〕)が最も網羅的である。

瑞西国人 ファーデル Henry L. Fardel

英語・フランス語・ラテン語 1894. 12. 1~1903. 7. 30



1866年(慶応2年)1月18日、スイスのノイシャートルに生まれた。ローザンヌ大学で修業した文学士。妻の姓名はエリザベス・ヂュー・ファーデル。来日の時期は不明であるが、来熊前は横浜ヴィクトリア学校長を務めていたが前任者ハーンの紹介により五高教師として招聘された。俸給年額3千円。雇入期間は明治27年12月1日より36年7月30日まで(この間の備継5回)。明治29年頃、熊本県尋常中学済々黉の嘱託講師も務めた。瑞邦館における演説会では3回、①Ancient greek Education [明28. 4. 20] ②The necessity of adapting a more rational and

practical system of representing thoughts [明治31. 4. 29] ③The war in South Africa [明33. 5. 5] のテーマで講演した。②は漢字が不便で思想の伝達に障害の少ないことを述べ、その改善策としてローマ字の採用を主張したものであった。③は明治33年5月5日発行の『龍南会雑誌』第78号に掲載された。明治36年9月より同44年9月まで東京高等商業学校の外国人教師を務め、英・仏語を担当した。

独国人 ボルヤーン Albert Bolljahn ドイツ語・ラテン語 1896. 9. 10~1898. 7. 31

1875年(明治8年)ステッチン近傍のボスケに生まれ、6歳より12歳までウセドーム準中学校に入り、ラテン語、英語、フランス語を学んだ後、将来教師となる目的でマッサウのブレバラフデンアンシュタルトに入学した。その後、ステッチンのベールリッツの教育館において実地に従事すること3年に及んだ。この時、東京にいる実兄のヨハネス・ボルヤーン(当時一高教師)の勧めに従い、外国の教育界において力を尽くし、且つ万有科学及び外国語の研究を行うために来日したという。明治29年9月10日付で五高ドイツ語教員となり月給150円を給与されたが、翌年7月31日傭期満了のところ更に傭継続となり2百円に増給。明治31年9月31日傭期満限により解傭。

英国人 ブランドラム John B. Brandram 英語 1898. 9. 16~1899. 3. 31

宣教師。1858年(安政5年)12月14日、英国ハーフォード郡ベンジョーバリシーチャップモーエンド村に生まれた。1864年1月より2年間家庭において読書習字を修業。1866年1月よりエックセター市私立学校に入学したが、翌年9月トードハンター教授の私立学校に移り6年間普通学を修業し退校。1873年9月ハーフォード郡ウワー町グラマースクールに入学、シリレ校長に従い普通学を修業。1877年1月より6カ月間ハーフォード郡ハイクロス・パリシー・コズレントンに従い大学入学のための準備をした。1877年10月、ケンブリッジ・クインズカレッジに入学。なお、これと並んでケンブリッジ大学の入学許可も得た。1878年6月、第1試験を受け、ギリシャ語とラテン語等は第1級に、数学等は第2級に及第した。さらに翌年6月、第2試験を受け第1級に及第。ついで1880年6月、第3試験(神学)を受け第1級に及第し、卒業と同時にバチューラー・オブ・アーツを受けた。その後、1892年には英国においてマスター・オブ・アーツの学位を得た。

職歴としては、1880年9月より81年10月までシーエムエス伝道会社設立の学校教員となったのを皮切りに、同年12月、イーレ学督より聖別されて執事となり、次いで同月より1883年12月までケンブリッジ市セント・エンズルーヂレスパリシー教会教師の補助となった。この間、1882年12月、イーレ監督より聖別され長老に進んだ。1883年10月、シーエムエス伝道会社より日本伝道の承諾を得たので、翌年(明治16年)2月、英国を出発し、同年5月5日長崎に着いた。そして明治20年5月の日本語学第2の試験に及第の上、熊本で伝道に従事するようになった。

明治26年7月帰国したが、同29年2月再び来日、長崎経由で同年9月着熊、伝道を再開した。

五高の英語の嘱託講師となったのは2年後の明治31年9月からで、翌年3月まで在職の週8時間受持ち、月手当金35円を支給された。明治31年3月31日開催の瑞邦館での外国語演説会では「ケンブリッジの生活」(Life of Cambridge)のテーマで演壇に立ち、自分のケンブリッジ大学時代の学生生活を興味深く語った。

独国人 エルドマンズデルフェル Ernst Erdmannsdörffer

ドイツ語・ラテン語 1898. 12. 28~1900. 7. 31



1870年(明治3年)1月27日、東プロセインのニーダーラウジッツ(現ポーランド領)のルッカウに生まれた。最初の教育をドレスデンの私立ペーメン学校で受けたが1881年に両親がベルリンに移住したので、エルンストもベルリンの王都実科高等学校で学ぶことになった。そして1890年、同校の卒業試験に合格した。その後、言語研究のため4年間にわたりベルリン、ハイデルベルク、ハレの各大学において学び研鑽をかさねた結果、1895年にハレ大学より哲学博士の称号を得た。専門は主にコマン言語学の分野であって、とくに古代プロヴァンス語とスペイン語には力を入れて研究し、学位論文もトルバドゥールの押韻に関するものであった。その第一部は1897年に単行本として出版された。学位受領後は個人教授の仕事と学術研究に従事していた。

ハイデルベルク大学教授で歴史家として有名なベルントハルト・エルドマンズデルフェルは叔父に当たる。

五高に招聘されたのは東京帝国大学法科大学のドイツ法教師ルートヴィヒ・レーンホルムの紹介によるもので、前任者ボルヤーンの代員としてであった。明治31年12月28日、長崎経由で熊本に到着した。契約により傭期は着熊の日から明治33年7月31日までと定められ、月俸250円が支給された。

明治32年(1899)2月11日の五高における紀元節の式典に出席したが、拝賀の礼を行わずに途中で退場したため問題化した。いわゆる独乙入事件である。ことの重大性に気づいたエルドマンズデルフェルは、拝賀しなかったのは、来日して日が浅く学校儀式の習慣に不案内なうえに、当日は朝から頭痛がして進退度を失ったためであって他意はなかった旨の謝罪状を中川元校長に提出した。そして頭痛がおさまった同月13日、あらためて奉安所において中川校長、上田整次教授、ヘンリー・ファーデルの立合いもとに拝賀をしなおした。九州日々新聞は同月14日及び15日の紙上でこれを不敬事件として取上げて、独乙人教師の失態を厳しく非難し、また、学校管理者の責任を追及した。

五高を満期解傭後、東京に移り、陸軍中央幼年学校のドイツ語教師となった。傭期は明治33年8月8日より34年3月31日までと短かったがこの間日本のドイツ学者との交流などを通して日本理解に努めたようである。

明治34年4月6日横浜解纜のケーニヒ・アルベルト号で帰独した。この時ドイツ留学に向かう大村仁太郎、滝廉太郎、白鳥庫吉、大森英太郎、田中宏らが同船していた。

著作には明治33年5月発行の『龍南会雑誌』第78号に発表した Jean-Jacques Rousseau

(独文)のほか、帰国後に書いた日本関係のエッセイ・論文に Wanderungen durch Tokyo (1904) Der Schematismus im japanischen Geistesleben (1912) Japanische Schul-und Bildungsfragen (1914) Das japanische Adoptionswesen (同上) がある。

独国人 アブラハム Franz Abraham ドイツ語・ラテン語 1900. 10. 10~1901. 7. 30

1872年(明治5年)12月24日、両親の住むベルリン市に生れた。父はカールといひ製造所を経営し、母はクラッセルト人にして共に新教を奉じていたのでフランツも同教を信仰した。6歳9カ月でベルリン市立高等学校に入学し、14歳9カ月を以てて学業証明書を得て一年志願の兵役を務めた。1890年11月5日同高等学校の卒業試験に及第し、その際、筆記試験の成績が好良だったので口頭試験を免除された経験をもつ。速記法を十分に練習し、また市町村及び行政の事務を深く講究した後、一年志願兵としてベルリンにおけるカイゼル・アレキサンデル・グレナチール近衛第一連隊において兵役に服した。

1894年6月4日、ベルリン大学哲学科に入学し、1899年7月月末迄、近代語(フランス語・プロヴァンス語・スペイン語・イタリア語を正科として、ゴート語。アングロサクソン語及び英語を副科として)及び哲学を修業した。

1899年7月、ザーレ河畔のハレ大学の哲学科に博士論文を呈出し、同年10月口頭試験に及第し、12月21日ディスプタチオン実施後、哲学博士の学位を受領した。学位受領後、直ちにベルリンにおいて再び籍を大学に入れ、同市フリードリヒ・ヴィルヘルム高等学校においてラテン語及びギリシャ語の追加試験をすませ1900年8月末まで法律学を研究した。軍隊の訓練完了後は1900年7月22日付の最高閣令に依って予備士官としてケーニヒ・フリードリヒ・ウィルヘルム第四世グレナディール第二連隊付を命ぜられた。

アブラハムの風貌印象について、明治33年10月発行の『龍南会雑誌』第82号の雑録は次のように伝えている。「本日龍南の一生あり、書を僕に寄せて、新任独逸語御雇教師の事を申来り候。曰く、先日よりアブラハムと云ふ博士独逸語教授として雇入相成候。龍南学童の口さがなき、直に油虫先生と綽名いたし候掬、教授を受け候ものは、皆その風采の頗る揚れるに一驚を喫し候、ウェルヘルム髯、淡紅の色、偉大なる体格、タブタブたるビール腹、いかにもカイゼルの国民に候。故エルドマン博士のメランコリーなりしに似ず、ブライト、エンド、チャフルにて、教授を受くるに何となく心地よく候。加之親切の教へ方、嚙砕かして口に含まする様にて、一週ならずして油虫の名は取消全然と相成候」。五高での雇入期間は最初の契約通り明治33年10月10日より34年7月30日までと短く、傭期延長はなかった。

独国人 ハーン Friedrich Carl Arnold Hahn

ドイツ語・ラテン語 1901. 9. 10~1910. 7. 31

1869年(明治2年)1月28日、ヴェスファーレン州ビーレフェルトに生れた。父はプロシヤの退役陸軍中尉アルベルト・ハーン、母はレンツの人でベルタといった。新教を信奉しその洗礼を受けた。いくつかの学校を歴訪した後、1887年ベルリン市帝国高等学校に入学し、1890年



秋に至り、同校の卒業証書（Reifezeugnis）を下付された。同年秋、ベルリンのフリードリヒ・ヴィルヘルム大学（ベルリン大学）に入学し、哲学科に学んだ。だが、兵役の義務と英国への長期修学旅行のため前後2回大学での学業を中断した。そのためようやく1900年の春に至り、ハレ大学において、優等を以って（cum laude）ドクトル・フィロゾフイーの学位を授与された。

1893年より94年にかけて一年間志願兵としてゲネラルフェルトツォイクマイステル野戦砲兵隊において兵役に従事し、1901年4月18日予備少尉に昇進した。

明治34年（1901）9月10日より同36年（1903）7月31日まで第五高等学校の独語・ラテン語の教師として月俸250円を給せられた。明治36年7月31日傭期満限の処、さらに同年8月1日より明治39年7月31日まで3カ年間傭継続となり月俸300円に増額された。その後更にもう一度同じ条件で3年間の傭継の契約を更新したが、明治40年3月31日依願解傭帰国し、同41年9月1日再び傭い入れられた。この間、明治37年10月27日奏任五等以上の待遇を受けた。

五高教師を辞職後、名古屋に移り、明治42年8月31日より大正9年3月31日まで第八高等学校のドイツ語科教師・講師を務めた。なおこの間、愛知県立医学専門学校においても嘱託講師としてドイツ語を教えた。期間は明治43年8月より大正4年3月まで。その後一旦帰国したが、大正10年（1921）再び来日、愛知医科大学予科の講師としてドイツ語授業を担当することになった。その任期は同年3月27日より昭和8年（1933）3月31日までに及んだ。

第八高等学校教授・沢井要一との共著に『なくてはならぬ和文独訳』（大正11年）『声音学本意独文進階』（大正13年）などがある。

米国人 ブラウン Charles Lafayette Brown 英語

1901. 1. 8～1901. 3. 31、1901. 10. 24～1902. 8. 31、1904. 9. 15～1905. 12. 31



1874年（明治7年）12月3日、北米合衆国北カロライナ州アヤデル郡に農業ロバート・ブラウンの五男として生まれた。7歳より同州シャーロット市において普通教育を受けた。14歳の時同州ベサニイ中学校に入学し、2年間修業した後、卒業した。家が貧しい農家だったので、少年時代から印刷屋の小僧や農家の手伝いなどアルバイトをしながら勉強してきた。1891年秋、ヴァージニア州ロアノーク・カレッジに入学した。そして1895年春に卒業となりバチュラー・オブ・アーツの学位を得た。宣教師を志望し、1895年秋ペンシルヴァニア州フィラデルフィア市のマウント・エアリー神学校（ルーテル派）に進み、1898年優秀な成績で同校を卒業した。卒業式の数日前、外国伝導局から日本に宣教師として赴任するように懇請され、この時すでにヴァージニア州のグラハム教会から招聘を受けていたので大いに迷った。

だが、聖職者として生きることを決めた以上、いかなることも神の御言に背いてはならぬと日本赴任を承諾した。

大平洋を渡り、長崎に着いたのは1898年（明治31年）11月、弱冠24歳のときであった。そして佐賀を中心としてキリスト教の伝導に従事したが、この頃、クリスチャンで長崎の鎮西学院と活水女学校で英語と生物学を教えていた遠山参良との運命的な出会いがあった。遠山は明治32年夏、両校を辞任し、同年8月熊本五高の英語嘱託講師となり、翌年1月五高教授になったが、それを追うかのようにブラウンも、明治33年11月、熊本に移住した。かくして熊本において伝導布教に従事するかたわら、五高の嘱託講師を務めることとなった。期間は明治34年1月より同年3月31日まで、同年10月24日より翌年8月31日まで、明治37年9月より39年12月31日までの3期に分かれていた。月手当金ははじめ30円、のち35円に昇給した。

日本滞在8年、32歳のとき、1906年（明治39年）4月、帰国した。そして同年6月北カロライナ州ダラスで開かれた南部ルーテル教会の総会に出席、日本にキリスト教主義中学校を設立する必要性を熱心に説いた。ブラウンの固い信念と熱意は総会を動かして、設立資金募集決議がなされた。1908年（明治41年）10月、設立資金5万円を携えて再び熊本に帰り、中学校建設の事業にとりかかった。

明治42年9月、ルーテル神学校（九州学院神学部前身）を開設し、校長を務めた。翌年1月19日、九州学院設立認可がおりた。場所は当時の飽託郡大江村である。明治44年4月15日、開校。初代学院長には五高教授を罷めた遠山参良を据え、自らは主事に就任した。

九州学院の揺ぎない礎をみたブラウンは、大正5年2月突然帰米し、翌年ルーテル教会が設立した外国伝導会社の幹事となった。1921年（大正10年）の春に至り、ルーテル教会連盟からアフリカ伝道視察を依頼され、同年4月にニューヨークを発ちアフリカに入った。だが南アフリカのリベリアを視察旅行中、黄熱病に罹り、12月5日、47歳の若さで亡くなった。

英国人 スウィート William Laxon Sweet 英語 1901. 10. 16~1906. 7. 31



生年は、五高の英語教師となった1901年（明治34年）当時24歳だったので逆算すると、1877年（明治10年）である。1884年より87年までシテウシュエージの私立学校において教育を受けた。ついで1887年より91年までハントンにあるハルロス語学校において教育を受け、マルボロフ・カレッジ及びバス・カレッジの学生になる資格を得た。1891年バス・カレッジに入学し、その内2年半は教頭ダンの監督下にあった。1894年7月、「オックスフォード エンド ケンブリッジ スクールエキザミネーション ボールド」において6科目の試験に合格し高等証明書を得た。1896年7月、北ロンドンにあるゴウルメント・スクールの教員に挙げられ、3年間勤務したが、これは父の死亡により大学進学希望を断念せざるを得なくなったためであった。1899年よりロンドンのキングス・カレッジにおいて専ら教授法を実地に研究しその余暇に古典文学、英文学、歴史及びドイツ語の講義に出席し、試験の成績により証明書を得た。ただし聴講は1901年7月で終了。前年キングス・カレッジにおいて古典文学の学生である資格（サムブルーク・スカラシップ）を得た。

ロンドン留学中の夏目漱石の紹介で1901年（明治34年）に来日し、五高の英語教師となった。

月俸金2百円。1906年（明治39年）7月31日解傭。

明治35年3月7日の瑞邦館における演説部大会で「シェークスピア」の題で発表した。これはシェークスピアを例として英文学研究法を説いたものであった。さらに同年11月20日発行の『龍南会雑誌』第95号には「フットボールの遊戯に就て」を寄稿した。

明治39年上京、同42年に東京高等師範学校の英語教師となり、大正10年迄その任にあった。五高生のことはいつまでも気にとめていたらしく桜井時雄（明40卒）は「先生が五高を去られて東京高等師範学校に教鞭をとられた後も、一月に一回位、五高出の数人の人に自宅を開放され、英会話や英文学を教えて下さいました」（『龍南回顧』P.19）と回想している。英語の教授法に関心が深かったスイートは明治39年に創刊された英語教師のための雑誌『英語教授』（The English Teacher's Magazine）の編集にたずさわった。

第一次大戦からロイター通信員を兼ねていたが、1922年（大正11年）に帰国してロイター通信本社に勤務した。彼は典型的な英国紳士で、在日中は外国人英語教師たちの中心人物であり、夫妻はメドレー（東京外国語学校教師）とともに東京素人演劇クラブ（Tokyo Amateur Dramatic Club）で活躍した。飯島東太郎との共著に『英国風物談』（1918）『続英国風物談』（1921）がある。

独国人 ヴェンクシュテルン Nathango Fritz von Wenckstern

英語 ドイツ語・ラテン語 1903. 9. 14~1909. 7. 31



1859年（安政6年）7月6日、ダンチツヒ（現在ポーランド領、グダニスク）に生まれた。ギムナジウムで文学的教育を受けた後、1883年から1887年まで仏国パリで雑誌事業及び近世語学、英国商法の研究に従事した。1887年ロンドンに渡り、やはり上記の研究を続けながら、1890年頃から日本へ向かう1903年までキガンポール・トレンチ・トリュブナー出版協会東洋部につとめ、校正係兼支配人の職を執っていた。この間東洋文学を学んだ。このパリ、ロンドン時代に英語を母国語と同じ程度にマスターし、その他の外国語にも通じた。

1895年、『大日本書史』A Bibliography of the Japanese EmpireをライデンのE. J. Brill社から出版した。

これは、1859年（安政6年）から1893年（明治26年）までの間に欧米及び東洋において西洋語（ロシア語を除く）によって書かれた日本関係の文献目録である。なお付録として、L. Pagés編の文献目録の原本を複製して載せているので、これにより1859年以前の文献も知ることができる。

1903年（明治36年）8月18日、ベルリンを立ち、シベリア経由で日本に向かった。この時すでに44歳であった。来日の目的は第一に、五高の招聘に応じてヘンリー・ファーデルの後任として、英語、ドイツ語、ラテン語を教えるためであったが、それとともに日本書誌の完成を期してのことであった。

五高での傭期は、途中一回の傭継を含めて、明治36年9月25日より明治42年7月31日まで

あった。月給300円。宿料25円。明治39年9月25日、奉任5等以上の待遇となった。担当学科は当初、上記3カ国語であったが、明治41年度からドイツ語だけを教えた。

熊本市北千反畑町79番地の家を借りて住んだが、ここは以前、夏目漱石が住んだ家であった。一時ヴェンクシュテルンの許に一間を借りていた高田保馬は「千反畑の家——熊本時代の思ひ出」(『五高同窓会会報』第1号、昭和2年)の中で次のように語っている。「ウエンクステルンは今から考えると、当時四十内外の年輩であったと思ふ。独身のせむしの人であった。語学は十二ヶ国語にも通じてゐた。(中略)朝から晩まで勉強をしつづけて、夜は一時にねると云ふ風であった。仕事は何であったかは当時の私にはよく分らなかつたが、机の抽出はすべて『日本書史』の補訂のための材料であるカードで一杯であったことを記憶する。(中略)私がいまだ独逸文をかくと労力を吝まらず直してくれるし、分らぬところを聞くと喜んで教へてくれた。」だが『龍南回顧』に収められたいくつかの文章によると、五高生たちから相当にいじめられたようである。その一例。「私は独法科であった。当時独乙語の教師に『セムシ』と短軀で背が上っていた格好のよくないウエンクステルンと云う人がいた。お人の良い柄であったが、或る一日某君(中略)が、チョウクの粉が一面についた念入りの黒板ふきを、教室の入口の戸と柱との間に入れ挟んで置いた。教師は知らずに戸を開けたから俄然頭上に落下して白色一面となった。さすがに温厚な彼氏も憤怒烈しく地をけて退去した。約二十分位教室内は笑声雑談止みもせず雑然として居たとき、校長さんが教務主任を伴はれて入室され、諄諄として生徒の不心得を誡め諭された。」(樋口芳包 明45.1部)

五高時代には『大日本書史』の完成に全力をあげたが、ほかに『法律ラテン語入門』Elementary Manual of Law Latin, especially for the use of japanese students (1905)を丸善より上梓した。119頁。ラテン語の簡単な歴史に始まり、文学・文法・語型論・シンタクスを説き、英文羅訳の練習問題と羅英単語集までそなえた懇切な入門書である。

来日1年後、1904年(明治37年)10月、ドイツ東亜協会 Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens、の会員となり、そこから数々の便宜を得ていたが、自らもその「会報」(Mitteilungen)第11巻(1907)に、少年時代からの趣味であった古銭蒐集に関する論文「私の東亜開孔古銭コレクションの配列のためのシャノン方式の応用」(Anwendung des Shannon-Systems zur Anordnung meiner Sammlung ostasiatischer Lochmünzen)を寄稿した。なお彼は、1908年(明治41年)12月23日の東京における東亜協会の例会でも「私はいかにして私の東亜開孔古銭コレクションを配列したか」という題で発表した。このときは司会者のH・ハースが原稿を代読した。

『大日本書史』第2巻は1907年(明治40年)に出版された。これは第1巻に引きつづき、1894年(明治27年)より1906年(明治39年)中頃までの日本関係の文献目録であるが、それに第1巻への追加を含み、さらにスエーデン語による文献も収められている。本巻は、編者の仕事を助けてくれた日本及び外国の友人や好意を寄せた人々に献呈されている(それらの人々の名は序文中に見える)。

1908年(明治41年)5月、五高における熱心な教育活動とくに『大日本書史』全2巻を編纂した功績に対し、日本政府より勲四等旭日小綬章を授与された。

五高を明治42年7月31日満期解傭となり、同年11月10日、陸軍砲工学校の独語教師として雇

い入れられた。そして、翌年4月30日解傭となった。

日本を去ったのは、1910年（明治43年）年の6月末から7月初めにかけてであったらしい。『日独郵報』Deutsche-Japan Post 第9巻第15号（明治43年7月9日発行）の人物彙報欄に、「日本の高等学校と専門学校で教師として数年にわたり勤務したウエンクシュテル氏はシベリア経由で帰独した。彼はそこからアルゼンチンへの招聘に応ずる予定でいる」（原文ドイツ語）とある。ベルリンのハプスブルク街5番地に住む親戚の許に一旦身を寄せたが、1911年の末頃、アルゼンチンに赴任した。ドイツ東亜協会の「会報」第16巻掲載の会員名簿（1914年7月現在）では、彼の住所はブエノスアイレスのドイツ総領事館気付となっている。1914年（大正3年）同地で死去した。

英国人 モール Ernest C. H. Moule

英語 1906. 9. 1～1910. 7. 31、1912. 9. 1～1914. 7. 31

1878年（明治11年）11月生まれ。1890年より1893年まで英国サレー州リンプスフィールド予備学校において修業。次いで1893年より1896年までロンドン市公立学校マーチャント・テイローアスに在学した。1902年より1903年までケムブリッジのリドレーホールにおいて神学科を修了したが、在学中に受けた数回の試験では常に優等の成績を得たほか、前後2回大学懸賞試験に応じその賞も受けた。さらにレギアス・プロフェッソル・オブ・デヒニチーの施行した大学試験においても優等の成績をおさめた。その後、オックスフォード及びケムブリッジ大学の予備試験に応じ優等の成績を得たが、この間数年にわたり英語・英文学の研究に従事した。1897年、英国を去り、上海のアングロチャイニーズ・スクールにおいて第二席の英語教師となり1902年2月まで在職の後、帰英した。1906年（明治39年）7月現在、教育事業に従事する目的で清国福州に滞在していた。五高における初傭は明治39年（1906）9月1日で、傭期はそれより明治42年（1909）7月31日までで月給300円であったが、さらに同年8月1日より明治45年（1912）7月31日まで傭継の手続がとられた。しかし、明治43年6月に至り、神経衰弱症に罹り、休職した。それに関して医師・福田令寿（熊本市山崎町66番地）が発行した診断書（明治43年6月2日付）には「現今専ラ静養ヲ加フベキモノニシテ自今數十ヶ月間ハ到底規律アル勤務ニ耐ヘサルモノト診断ニ及ヒ候也」とあった。病気回復後、再び傭外国人教師として大正元年9月1日より大正3年7月31日まで勤務した。趣味は柔道。名家の出の紳士で、発音や言葉使いに純英国式を守った。齊藤惣一は「私の感化を受けたのはモール氏であった。政治科に行かないで、英文科に向ふこと、なった動機は、この先生とのある日の会話からであった。政治家や、外交官に比べて、他に行くべき道があると聞かされ、単純な感激しやすい高等学校時代の私には、一生の方向を支配する程に少からぬ影響をもつに至ったのである」（『龍南』第238号、昭和12年）と回想している。

独国人 ゲェベル Max August Goebel ドイツ語 1907. 9. 1～1908. 8. 31

1875年（明治8年）3月17日、バルメン（ライン州）に生れた。はじめ小学校に入り、1885

年より1894年まで郷里の中等学校に在学した。次いで神学及び歴史を学ぶために、1894年ストラスブルク大学に入ったが、翌年ハレ大学に移った。1897年の夏、オランダのユトレヒト大学よりベルンハルト奨学資金を与えられたので同大学に移り、1897年より1900年までその研究を継続した。その間、1898年4月及び1900年10月コブレンツにおける政府の神学試験に合格した。1900年より翌年までマンハイム（プファルツ州）の実科学校（Realanstalt）に教師として奉職。その後、1901年より1902年までチュービンゲンにて兵役に服した後、1902年より1904年までライン河畔ゴータスベルク新教学校に教師として奉職。1904年1月、ボンにおける高等学校教員検定試験に合格し、1904年より1907年まで教授（Oberlehrer）としてベルリン近傍ステューグリッツの中等学校に奉職した。

ベルリン大学付属東洋語学校の日本語教授ルドルフ・ランゲの勸奨により、毎月300円の俸給を得て、1907年（明治40年）9月1日より1908年（明治41年）8月31日まで第五高等学校外国人教師として独語を担当することになり、プロセンの文部省より1907年7月1日より1908年9月30日まで15カ月の賜暇を得て来日した。

趣味はヴァイオリン演奏で、よく生徒たちに弾いて聞かせた。瑞邦館の演説大会では明治41年4月16日、桑野礼治の通訳で「独乙学生生活」について講演した。同年6月、在職中の特別の厚情に対する感謝の記念品として明珍信家作の青糸威の鎧一領を贈呈された。第一次世界大戦のときに戦死したと伝えられている。

独国人 プラウト Joseph Plaut ドイツ語・ラテン語 1909. 9. 1～1912. 7. 31

1884年（明治17年）2月16日生まる。父はヘルマン・プラウトといい、ベルリン大学付属東洋語学校の日本語教師であった。はじめベルリンのゲマインデシューレ小学校に入学し、次いで市立ゾフィエンギムナジウムのゼキスタ第九学年に入学した。そこで1899年一年志願兵の資格を得、ついに1902年の復活祭に至り、口頭試験の免除の特典を以って学業成熟証書を授与され、大学入学の資格を得た。かくしてベルリン大学において当初、英語と仏語、後にゲルマン語学、ドイツ語学・文学及び文明史、美術史を修めた。来日前の1908年「ゴットフリート・ケラー著『七つの伝説』に就いて」と題する論文において近世及び古代の物語文学に関する研究を行い、ドクトル・フィロソフィーの学位を授与された。

一方、当時新設の私有印刷及び文書印刷文庫において、教授マックス・ヘルマンの指導の下に図書館事業に執掌した。これと同時に数年来ドイツ語並びに外国語の教授の経験があった。とくに大学生や労働者教育機関の創立に関係し、約4学期みずからドイツ語の時間を担当し時に多数の聴講生を集めたことがあった。

文学的活動としては先には『近世語及び文学研究録』及び『ウィーン普通文学雑誌』の一員並びに評論家として筆を執り、後には故ベヒトルド・チュリヒ教授（1897年没）の大著『ゴットフリート・ケラーの伝記・書翰・日記』3巻の校訂に当たるとともにこの新版を世に出す業務に就いた。

父ヘルマン・プラウトが日本語学者で、東洋語学校の教師をしていた関係上、プラウト家には永年にわたりベルリン在留の日本人が多く来往していた。したがって、ヨーゼフはつとに日

本に対して興味を感じ、ずっと以前からドイツ語教師として日本に渡りたいと考えていた。1909年（1月7日）現在ベルリン市西部アウクスブルク街23番地に住んでいた。

明治42年（1909）9月1日、五高の独語・ラテン語担当の外国人教師に採用され、同45年（1912）7月31日解僱となった。この間、明治44年11月より同45年6月まで私立熊本医学専門学校（現熊本大学）の独語講師を務めた。後年、大正3年より5年頃まで陸軍中央幼年学校でドイツ語を教えた。

独国人 プレンツェル Otto Adalbert Willi Prenzel

ドイツ語 1909. 9. 1~1912. 8. 31

1884年（明治17年）1月10日、シュタンダールに生まれた。父はテオドール・プレントツェルといいライン地方の知名の教育家で、当時（1909年頃）ヴッツラーのギムナジウムの教授を務めていた。父が居をシュタンダールからビーレフェルトに移したのでヴィリーも当地の予備校に2年学んだ後、ライン河畔のメエルス（現メーレン）の小学校に学ぶこと1年、その後、1893年の復活祭に至り、父が主座教師をしていた当市の高等学校に入学した。そして1902年の復活祭の時期に卒業証書を授与された。次いでゲルマン文献学、歴史及び哲学研究のためにハイデルベルク、ベルリン、マールブルクの諸大学に学んだ。1907年1月、マールブルク大学におけるドイツ語、史学及び哲学の検定試験に合格し、同年11月哲学博士の学位を得た。彼の大学における師はブラウネ・ワルデペルヒ、エーリスマン、エーリヒ・シュミット、リヒャルト・エム・マイヤー、レーテ、フリードリヒ、フォクト、エルスター及びレエデであり、これらの諸教授によるドイツ文学及び文法上の種々の講義を聴き、またその演習に参加した。

検定試験に合格後、ケルンにあって官立学校に勤務しドイツ語と歴史を担当していたが、かねてより外国と外国人に対して興味を持っていたので、ドイツ国内は勿論、英国にも長期滞在してこの方面を知識を増進することに努力した。それでプレントツェルは職分を執行しながら、傍ら外国と外国人の状態に関する知識を豊富にしてくれる業務に従事することを希望していた。1909年2月現在ケルン市21番地に住んでいた。1909年7月渡日。

五高での雇用期間は明治42年（1909）9月1日より同45年（1911）8月31日まで。月俸3百円。明治43年、松浦寅三郎校長、三浦吉兵衛、杉山道香、本田 弘各教授（いずれも文学士）とともに築紫神社に参詣した。

1911年8月よりベルリンにあるステーグリッツのギムナジウムに勤めた。第一次大戦中1915年9月より翌年6月まで出征したが、戦場で発病したため除隊された。その後再びステーグリッツのギムナジウムの教壇に立った。大正11年（1922）再度来日、大正14年（1925）まで旧制佐賀高等学校でドイツ語を教えた。

日本研究にも興味を寄せ、その方面の著作にCharakter und Politik des Japaners = Deutsche Kriegsschriften Nr. 7（1915）があるほか、生花に関する論文数篇がある。また日本関係の書評を1939年まで各誌に書いている。

英国人 ウォラー Harold H. Waller 英語 1910. 10. 1~1916. 7. 31



1887年（明治10年）11月16日英国生まれ。来日前の経歴及び来日時期については不詳である。明治43年（1910）4月より7月まで東京外国語学校において、オースチン・ウィリアム・メドレーの賜暇帰国中その代理として講師を務めた。五高の傭外国教師となったのは明治43年（1910）10月1日からで、モールの後任としてであった。月俸300円支給。2回傭継をへて大正5年7月31日まで在職した。明治44年10月2日の瑞邦館における外国語演説会では「英国の学校及び大学生活」（School and University Life in England）について発表しているほか、大正3年10月28日開催の同会でも「学生演説の批評」（Critique of the Students Addresses）を発表。また、『龍南会雑誌』第144号（明45. 2）にBushido（詩）、153号（大3. 3）に「松浦校長・謝辞」（Dr. Matsuura. An Appreciation）を寄稿した。夫人は病気のため一足早く帰英したが、まもなく死亡（大正5年1月頃）。帰国旅費675円を支給され大正5年8月故国に帰り、バス市シオン・ビル街36番地に居往。なお、兄F.C.ウォラー中佐も夫人とともに大正元年頃来日した。

独国人 ビュットナー Sophie Büttner ドイツ語 1911. 9. 1~1914. 7. 31

1868年（明治元年）プロイセン国ウェーフェルリンゲンに生れた。ハルバーシュタット高等女学校を卒業後、英語研究のため数年英国に渡り、ついでまた仏語を学ぶためパリに赴いた。その後はドイツに留まり外国人のために私宅教授を行なった。彼女の教えを受けた者にはアメリカ人、英国人、フランス人、ノルウェー人がいたが、主なものは日本人であって東京・京都両大学の教授、工業学校・師範学校の教授、文部省及び在独日本大使館員、官吏、医師、技師等がいた。1906年アメリカに赴いた。1907年日本より招聘され、鹿児島第七高等学校造士館教師となったが、2年後、ベルリンに帰り再び日本人のために私宅教授をなした。

1911年（明治44年）の夏、熊本第五高等学校の聘に応じ9月6日着熊した。当初の契約では傭期は明治44年9月1日より同45年7月31日迄で、月俸300円であったが、その後継傭となり、大正4年7月31日傭期満了につき解傭となった。大正3年3月10日発行の『龍南会雑誌』第153号に「松浦校長殿」（Herr Direktor Matuura）を寄稿したほか、同年10月28日開催の瑞邦館における外国語演説会では「Über deutsche Sitten und Schillers „Taucher” in Prosa」というテーマで発表した。前者は、五高で疫病が発生したため、責任をとって松浦校長が辞職したのを惜しみ、その高潔な人格と心底からの親切をたたえたものである。

米国人 ウッドロウ Catharine Gulic Woodrough 英語 1914. 8. 31~1915. 6. 30

1878年（明治11年）10月15日、米国ボストンに生まれた。1891年ホノルルの学校に入学し、後に米国本土に帰り、オハイオ州オックスフォードにあるウエスタン・カレッジに入学した。

1895年より99年までシンシナチイ、ニューヨーク、ドイツのベルリンにおいて有名教授について英語・英文学、音楽、弁論術を専攻した。その後、これらの科目を私宅と学校で教える一方各所で講演した。

1912年9月より翌年の6月にかけて、オハイオ州ハミルトン市にある外国人の子弟のための学校で英語と朗読法 (Elocution) の教師を務めていた。だがまもなくして渡日、1913年9月より熊本商業学校の英会話の教師に就任した。そして1913年(大正3年)8月31日より翌年の6月30日まで五高の英語科の嘱託講師となり、月手当金160円を支給された。大正3年10月28日開催の瑞邦館での外国語演説会ではマコーレーの The Legend of Horatius を朗読した。「ウッドラフ先生(米夫人、英会話)は中々の美人であった。校舎の外で先生の姿を見付けると、不良生徒共がエゾエゾと弥次を飛ばしたりしたが、夫人はニコニコして意に介される様子も無かった」(『龍南回顧』P.166)と、大坪昌治(大6卒)は語っている。

独国人 グンデルト Wilhelm Gundert ドイツ語 1915. 8. 1～1920. 7. 31



1880年(明治13年)4月12日、ヴェルテンベルク州都シュツットガルトに生まれた。父ダーヴィットは同市で書籍出版業を営んでいた。母マリーはスイスのバーゼルのホーホ家出身である。1886年より88年までシュツットガルトの小学校で学び、次いで1894年まで同市にあるエーベルハルト・ルートヴィヒ・ギムナジウムに学んだ。1894年より96年までショエンタール市のヴェルテンベルク国立初等新教学校に学んだが、1896年ウーラッハ市に移り、そこの初等神教学校に入り、1898年1月、卒業した。卒業後、1902年まで新教信條、哲理及び神学の研究に没頭した。すなわち、1898年より1900年までチュービンゲン大学附属ヴェルテンベルク国立新教神学校において、次いで1900年より1901年までハレ大学、1901年より1902年まで再びチュービンゲン大学の各大学において。1902年8月、チュービンゲンで行われた第1回神学就職試験に及第し、ヴェルテンベルク国立新教地方教会牧師候補の資格を得た。

かくして1902年9月、ヴェルテンベルク新教地方教会副牧師に任命され、1904年4月までその任にあったが同年7月、シュツットガルトにおける第2回就職試験に及第し、上記教会の正牧師の資格を得た。次いで同年8月より1905年10月までドイツ伝道学生団及びドイツ・キリスト教学生協会の書記を務めた。その後、約4カ月間、ビーレフェルト近郊の町ベートルにある神学伝道候補者養成所において、派遣伝道の準備及び病者看護法について訓練を受けた。

1906年(明治39年)、伝道の目的で来日した。はじめ同年4月より10月まで東京において日本語を修めた。次いで同年11月、第一高等学校の独語教師に雇い入れられ、1909年(明治42年)4月までその任にあった。来日の年の12月、東京においてヴェルテンベルクのベヒリンゲン出身のヘレーネ・ポッセルと結婚した(のち二人の間に3男1女が生まれたが、長男ハンスは早死した)。

一高教師を罷めた後、明治42年4月より翌年6月まで東京において伝道の仕事をしながら日本語研究を継続した。次いで同月より大正4年5月まで伝道のため新潟県の村松町に住んだが

(この間、明治45年4月より10月まで一時帰国)ここで、日本の庶民生活に通暁する機会を多く得た。なお、この村松町への赴任は内村鑑三の一派の伝道事業に参加するためであった。五高講師となったのは大正4年8月で、ビュッナーの後任として週22時間、独語を教えた。月手当金300円。大正8年7月、傭外国教師となったが、9年7月31日傭期満了につき解傭。第一次世界大戦中、日独は敵対関係にあったがドイツ人教師として生徒の尊敬を受けた。熊本では初めて禅と仏教に触れたといわれる。なお、五高瑞邦館における外国語演会では、「如何に独乙語を学ぶか」(大5. 12. 22)と「ドイツの大学の美点」Die Schönheit der deutschen Universität(大8. 3. 5)等の講演をなした。2年間のドイツ滞在(この間、ハンブルク大学で日本宗教史の研究に従った)の後、1922年(大正11年)再び訪日、新設の水戸高等学校の教師となった。今度は、キリスト教の伝道が目的ではなく、日独文化の交流の強化を主な自分の目的とした。それで1927年から1929年まで日独文化協会のドイツ側代表となった。グンデルトの日本研究はドイツでも高く評価され、1925年、ハンブルク大学から文学博士を授与された。1936年から1945年までハンブルク大学の日本学の正教授、1937年文学部長、1938年まで大学総長。表彰も多く、勲四等旭日章(1936)、東京大学名誉博士(1962)、勲二等瑞宝章(1969)、日本学士院名誉会員(1970)等に輝いた。

1956年以後、ドナウ河畔ノイ・ウルムに住み、『碧巖録』Bi-yän-lu. Niederschrift von der smaragdnen Felswandの独訳と研究に没頭した。1971年(昭和46年)8月3日、病没した。日本文学・宗教に関する多くの著者があるが、前記『碧巖録』や学位論文となった『日本の能楽における神道』Der Schintoismus im Japanischen Nô-Drama(1925)、『日本文学』Die Japanische Literatur(1929)『日本宗教史』Japanische Religionsgeschichte(1935)、『東洋の詩』Lyrik des Ostens(1952)は有名である。

英国人 ポーター William N. Porter 英語 1916. 8. 1~1925. 3. 31

1863年(文久3年)1月12日、アイルランドのウェーリントに生まれた。諸私立学校において学んだ、モーブラ・カレッジに入学し、1886年同校を卒業した。卒業後の経歴としては、アイルランドのベルファースト海軍造船所で5年間徒弟修業についた後、1891年より1901年までベルファースト、ニューポート(米国)、グラスゴー、ポートランド(米国)、サンフランシスコ(米国)及びリヴァプールにおいて造船(軍艦及び商船)製図技師として勤務した。この間、日本軍艦「朝日」の一部分の図案にも参加した。1901年よりリヴァプールにおいてプレス・ポーター会社を経営、広く造船図案の依頼に応じた。

1908年オックスフォード大学で日本語研究に志し上記の会社を辞した。1909年百人一首の英訳 A Hundred Verses from old Japan をクラレンドン版にて発行したのをはじめとして、1911年発句集英訳 A Year of Japanese Epigrams をオックスフォード大学出版より、1912年土佐日記英訳 The Tosa Diary を倫敦ヘンリー・フラウド会社より、及び1914年徒然草英訳 The Miscellamy of Japanese Priest を倫敦ハンフリー・ミルフォード会社より、それぞれ出版した。その後来日し、1915年(大正4年)2月より神戸第二中学校の英語教師を務めた。五高の傭外国人教師となったのは大正5年8月からで同14年3月31日まで在職した。月俸300

円支給。

瑞邦館における外国語演説会では、大正8年3月5日における「英国公立学校生活」(English Public School Life)、同10年10月21日に「fahan(?)の眼と耳」(Eyes and Ears in fahan)を発表しているが、前者のときは、ポーターの美しいジェスチャーと流麗な声量とは聴集に多大の印象を与えたという。1933年現在の住所：Buena Vista Hotel、Eagetqust、Bermuda。

独国人 ヒューボッター Franz Hübotter ドイツ語 1921. 4. 1~1925. 3. 31



1881年(明治14年)12月5日、ワイマールに生まれた。父のエドゥアルトは有名な宮廷俳優、母はフルダといい軍人の娘であった。少年時代から外国語に興味を持ちヘブライ語、ポーランド語を学び、次いで東洋語を研究した。1901年より1906年までイエーナ、ベルリン、ハイデルベルクの各大学で医学を修め、1906年に国家試験に合格し、医学博士となった。一方、その間に中国語、満州語を研究し、ベルリン大学の医学部助手時代にChan-kuotséに関する博士論文を書いたが、指導教授のヴィルヘルム・グルーベが死亡したために1912年によやくライプツィヒ大学から学位を授与された。その後の医学研究はロンドンの脳外科ヴィクター・A・H・ホースレー卿の下で続け、パリでは医学研究の傍ら、エドアール・シャヴァンヌの中国学の講義を聴いた。ベルリンに戻ると医学活動のほかにアラビア語、トルコ語、ペルシャ語、シリア語のちにはチベット語まで学んだ。1914年ベルリン大学の医史学講座を担当。第一次大戦後、1921年、第五高等学校の招聘に応じて来日した。当時、文部省在外研究員としてベルリン大学留学中の大津康(一高教授)と医学博士賀屋隆吉の推薦によるものだった。大津の五高当局に宛てた書信の一節に次のようにあった。「〈ヒューボッター氏ハ〉風采モヨロシク且非常ニ温厚ナル紳士ト見受ケ申候語学ノ教師ニハ勿體ナキヤウニ候ヘドモ当人ハ日本医学史研究ノ希望ニテ特ニ渡日ヲ希望スル様子ニ候文学士トシテハフィロロギーヲヤリタル人故語学モ専門ニ候(中略)既ニ今日伯林大学ノ講師ヲモ致シ居ルコトナリ又種々ノ著書モアリ信用スベキ人物ト存候。」

ヒューボッターは五高赴任に際して次のような自己紹介を書き送っている。

「私は既に永い間、東アジアを徹底的に知り、古来の日本と中国の医学を現地に行って研究したいと切望していました。というのは私はベルリン大学で医学史、特に東洋医学史の講座を中心になって担当しているからです。そのために私のような人は東洋学者と歴史家と医者と同時に兼ねていなければなりません。元来、医者である私が貴高等学校の語学教師に就任するのは、一見奇異に思われるかも知れませんが、私は1912年にドイツにおいて哲学博士の学位を得ました。私の受けた審査科目は古典語、中国語、哲学(特にカント)トルコ語、ペルシャ語です。私は試験に大きな称讃を以って(magna cum laude)合格しました。私は哲学、ドイツ文学、インドゲルマン言語にたえず強い関心を寄せていました。有名なドイツの俳優の息子として私自身、修辞学をいくらか修業し、明瞭で、正しい、全く訛のないドイツ語の発音をいたします」(原文ドイツ語)。

来日した1921年、東京においてアンネマリー・ホルネマン（1895-1968）と結婚した。同年（大正10年）4月21日付で五高教師として雇い入れられ月俸425円を支給された。

津々見仙甫（大15卒）は「ヒューポッター博士」（『龍南回顧』所収）の中で次のように回想している。

「大正十一年の春、希望に燃えて入学式に列した時、教授陣の中に鉄縁の小さな眼鏡を懸けた欧州の偉丈夫が居られた。父がローベルト・コッホの肖像画を診察室にかけて居たので、あの画そのままの方が居られるものだとして強く印象付けられた。授業の進展につれて我々の教室に来られ、英語で我々に独逸語を教へて下さるのがヒューポッター先生であった。翌日、桜の並木の下でお会ひした時は第一次大戦当時の独逸軍医大尉の制服で、我々に挙手の返礼を下さった事が物珍らしく、接してる中に、先生は伯林大学の客員教授で、医学史の講座を担当され、臨床方面では外科医としての研鑽を積んだ医学博士であることが判った。我々医学コースの生徒の憧れの的であった。本当に博学多識で、古代史が出るやら、ゲーテ、シルレルの詩が出るやら、多彩な教材で我々を導いて下さったが、眼鏡の下の青い眼から悲しい光をほとぼらせ、私の目をじっと見つめ乍らお話し下さった『マッチ売りの少女』のお話し等、忘れんとして忘れ得ない。当時、熊本の音楽研究会の請いを入れられステージに立って独逸のリードを唱はれた事があった。その中にハイネ作詩シューマン作曲の『二人の擲弾兵』があり、前日聞いて来た生徒達が教室でせがむと、苦笑いしつつ教壇の一角に立って唱って下さった時、敗戦独逸人の気持ちだが、此の詩の最後のフランス国歌を歌ひ乍ら国に殉ずる二人の兵士の気持ちににじみ出て全身火の玉の如く、一同肅として聞き入ってしまった。後年映画『制服の処女』を見た時、学校長が生徒達に詩を読んで聞かせる場面がとても印象的であったが、我々にもシルレルの、トロイ戦争でヘクターがその妻ヘレンに別れて城壁に一騎打ちに行く場面を読んで下さったお声が今尚耳に残って居る。」

五高教師を満期解僱になった1925年（大正15年）以後は大体中国にあって、最初プロテスタント系の伝導病院次いで自分の病院で医者として活動した。その頃仏教教区に加入した。

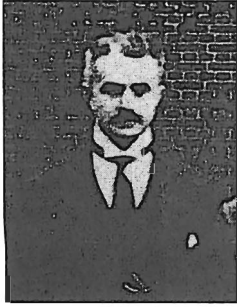
1915年中国共産党員により逮捕され、死刑の判決を受けたが、のち赦免され1953年ドイツへ送還された。帰国後すでに70歳を過ぎていたけれども新しく病院を開業し、死ぬまで漢方医学、特に針灸療法を実施した。その傍らベルリン大学の非常勤務教授となり少数の学生たちに漢方医学とその歴史を教えた。開業医及び教師としての仕事以外は専門の中国医学史の研究に全力を傾注した。

多くの著作を残したが、『20世紀初頭における中国医学とその歴史的発展過程』Die chinesische Medizin zu Beginn des zwanzigsten Jahrhunderts und historischer Entwicklungsgang (1929) は現在でも中国医学史の基本図書と見なされている。

独国人 ドル Georg Hans Doll

ドイツ語 1915. 5. 11~1934. 3. 31、1934. 9. 1~1945. 9. 30

1882年（明治15年）11月9日、バーデン州のエッピンゲンに生まれた。出生地において小学校3年、中学校6年間の教育を終了。ハイデルベルクのギムナジウムで3年間の教育を終了後、



1900年より1902年までミュンヘン大学で獣医学を学んだが家庭の事情により4学期で中止した。

1906年より1912年までベルリンの出版社に勤務したが1913年同地のペールリッツ語学校に移り、ドイツ語教師兼校長代理を務めた。この間1908年より1909年まで兵役服務。1911年及び1912年に各2カ月間の勤務演習に服役、1914年より1918年まで第一次大戦に予備將校として参戦且つ表彰された。大正14年（1925）5月11日、第五高等学校の独語教師に雇い入れられた。後年ドルは来熊当時のことを「日本に二十二年」22 Jahre

in Japan（『龍南回顧』所収）という文章の中で次のように述べている。

「大正天皇の銀婚式の当日、私たち、即ち妻と二人の娘と私は白山丸にて神戸に上陸した。市も田舎も賑々しく飾られていた。小島〔伊佐美〕先生が私たちを迎え、私たちの新しい住居へつれて行くために、熊本から来ておいでであった。先生は列車が発発するまで神戸の町を案内して下さった。何を見ても、すべてが珍らしく私たちの最大の興味をよび起した。上熊本の停車場には溝淵校長と数人の同僚の方々が待っておられ、私たちを官舎へつれて行かれた。私たちは御厚意を感謝した。沿線のすばらしい風景は私たちを恍惚たらしめた。進むにつれて風景ますます美しく、九州に入るや最も美しく、そして熊本、私たちの将来の栖処は私たちを感激させた。嬉しい妻と二人の娘は、すばらしい庭のまん中にある官舎を人の住めるようにするため直ちに掃除にとりかかり、数日の後には住み心持のよい家になった。その間、親切な同僚の方々は助言と助力を惜しまず、他郷に在る感は間もなく消えた。町に行っても、すぐ私たちは馴染んだのだった。はじめ奇異に思われた多くのことも間もなく親しいものとなった。」（渡辺格司訳）

五高では傭外国語教師として月俸425円を支給され、黒髪町五高官舎に住んだ。昭和3年4月傭期満了につき傭継し、同年10月奏任に準じて取扱われた。昭和5年7月、能についての論文及び『鉢木』の翻訳をブリュッセル大学に提出、文学博士の学位を授与された。昭和9年（1934）3月31日、2回目の傭期満了につき解傭となり、翌月、一旦帰国した。そしてドイツ各地で日本文化に関する講演をなした。

半年後、昭和9年9月1日、再び傭外国語教師として五高に復職し、月俸400円を支給された。以来、契約を更新しつつ、昭和20年9月30日解傭となるまで五高最後の外国人教師として在任し、五高職員・学生とともに戦争の苛酷な時期と敗戦を体験した。なお、昭和16年3月より、熊本陸軍幼年学校で英語を教え、妻アンナ・ドルも同校でドイツ語を教えた。同年9月12日、長年ドイツ語教師として職務に精励し、また日本文化の研究と紹介（かねてよりテークリッペ・ルントシャウやフォス新聞を通じて日本文化の宣伝に努めていた）に尽した功績により勲五等瑞宝章を贈られた。「『ドル先生』と言えば、一九二五年（大正十四年）以降五高生活を送った者にとっては、スラリとした体つき、温かいマナザシを持った先生の温容を懐しく思い出すであろう」〈荻原只雄〉（『龍南回顧』）とあるように旧五高生たちにとってシンボリック的存在であった。

1947年（昭和22年）10月、故郷エッピンゲンに帰り、そこの成人学校 Volkshochschule の教頭の地位に就き、日本と日本人について多くの講義をした。1966年頃以後、フランクフルト

北方タウヌス山地のファルケンシュタインにある「老人の家」に夫妻で住み、日本からかつての教え子が訪ねると、熊本の思い出話しにふけるのを常とした。

米国人 スペンサー D. S. Spencer 英語 1925. 9. 22～1925. 11. 12

1854年（安政元年）1月31日、北米合衆国ペンシルヴァニア州ワイオミン・カオンチー・レモン町に生まれた。1879年ペンシルヴァニア州キングストン市ワイオミン高等学校を卒業し引きつづき1カ年間、同校においてラテン語と哲学を研究。1882年6月、ヅルー神学校を卒業、神学士の学位を受領した。次いで1883年より86年まで東京青山学院の教授を務めた後、長崎鎮西学院長となった（1892年まで）。1893年より99年まで名古屋地方の伝道に従事したが、1904年に帰米し、本国の外国伝道会社のための巡回員となった（1907年まで）。1907年（明治40年）中に再び来日し、1912年まで東京教父館理事を務めた。なおこの間、1909年、シラキュース大学より神学博士の学位を受領した。1913年より1919年まで再び名古屋地方の伝道に従事するかたわら、明倫中学校の英語講師となった。その後再び帰米し、約2年間、ニューヨーク市の世界教会連盟アジア部の主事の地位にあった。熊本に宣教師として来住したのは1921年（大正10年）である。五高講師となったのはその4年後、大正14年9月22日からで、期間は約2カ月と非常に短かった（月手当金60円）。

米国人 ミラー L. S. G. Miller

英語 1925. 9. 22～1925. 11. 21、1937. 4. 1～1937. 7. 31



1895年（明治28年）8月23日、北米合衆国ヴァージニア州ウインチェスター市に生まれた。少年時代を同市で送り、1895年9月、同州ロアノック大学予科入学。2年後同予科を修了、本科に進んだ。1901年6月、同予科を卒業、バチュラー・オブ・アーツの学位を受けた。1904年9月、考えるところがあってフィラデルフィア市ルーテル派神学校マウント・エリアに進学した。24歳で同神学校を卒業すると、1907年（明治40年）、北米一致ルーテル教会の派遣宣教師として横浜に来た。同年11月、熊本市に在住、翌明治41年10月まで伝道に従事した。次いで福岡市に転住、大正9年まで伝道に当たった。日本語を学びながら神の福音を説く心細さ、辛さは並大抵ではなかった。だが、大正9年11月5日付で熊本県私立九州学院英語科教員に採用され、ようやく生活も安定した。以後31年間、九州学院の宣教師として働くことになった。

五高の嘱託講師を務めたのは、スペンサーと同じ大正14年9月22日より同11月21日まで（月手当金60円）及び昭和12年4月1日より同7月31日まで（月手当金100円）である。

第二次大戦中、米国政府より日本と日本人についての情報提供の要請を受け、心を痛めた。愛する祖国に協力することは一人のアメリカ国民として当然の義務であろう。だが米国に協力することは第二の故国日本を、九州学院の人々を裏切ることになる。ミラーは断った後の米国政府の圧力を覚悟して協力要請を拒否した。自分はユダになりたくないというのが彼の気持だった。

1951年7月帰国、ウインチェスターから熊本に思いを及ぼし、つねに九州学院のことに思いを馳せて静かに信仰生活を送っていたが、1977年（昭和52年）8月9日、息を引きとった。

英国人 マイヤー Leo Meyer 英語 1925. 11. 15～1928. 3. 31

1901年（明治34年）6月27日生まれ。バチュラー・オブ・アーツ及びマスター・オブ・アーツを取得。2年間、ストカットバート・グラマースクールで教鞭を執った。この間、諸学会で講演を行ったほか、小説教篇を書いた。来日直前は、ダーミュハム大学で古典学を勉強中であったが、英国留学中の岡本清逸五高教授の紹介により五高傭外国人教師として招聘された。傭期は大正14年11月15日より昭和3年3月31日までで、月俸425円を支給された。

英国人 マーター James Graham de Garlieb Martyr 英語 1928. 4. 1～1937. 3. 31



1883年（明治16年）9月12日生まれ。来日前のことは不詳である。1911年（明治44年）4月1日、広島県江田島海軍兵学校の英語教師に傭い入れられた。大正3年3月31日同校を辞任し、同年4月、第八高等学校の英語教師に傭い入れられたけれども、同年12月には第一次欧州大戦の勃発のため同校を辞任し、帰国した。

昭和3年、再び来日し、4月1日より第五高等学校傭外国人教師に就任した。月俸420円支給。熊本市黒髪町の五高官舎に住んだ。

ユーモアのある良教師で生徒たちに愛された。二代目ラフカディオ・ハーンを以って任じていたらしく教室でよくハーンの話をした。石田亮一（昭12卒）によるとある日、「ハーンが五高に来た当時、五高生が辛く当っていじめるので、時々悲しくなった。そんな時ハーンは竜田山中腹の石仏を訪ねて、地藏さんの肩を抱いて話しかけ、“何故五高生が自分に辛く当るのであろうか”と嘆いては、わづかに自分を慰めていた。」（『龍南回顧』P710）と話したという。

昭和6年と9年の2回の傭継を経て、昭和12年（1937）3月31日付で傭期満了となり五高教師を辞職した。この間、九州帝国大学法文学部の英文学講師を務めた（昭和9～10年）。そして昭和12年4月27日、神戸発欧州航路外国汽船ヘレナス号で一旦帰国したが、まもなく今度は英国大使館のスポークスマンとなって来日した。在京の五高卒業生たちは彼を時々クラス会に招待した。

昭和16年9月、江田島海軍兵学校及び五高において永年、英語教師として職務に精励し、また常に日本文化の研究に努めた功績により勲五等瑞宝章を授与された。昭和38年頃セイロイン島で死亡。

著書に『江田島物語』Etajima tales (1913)『蛤之島・秋津島』『大日本』『龍南の五高生』Gokosei of Ryunan (1930)等がある。『江田島物語』は海軍兵学校教師時代の作。海軍に入ろうとする青年に兵学校に関する知識を与える目的で物したもので、英詩 Etajima を巻頭に、江田島健児の日常生活を平易な英文で述べている。

英国人 シリンガー G. W. Schillinger 英語 1937. 4. 1~1937. 7. 31

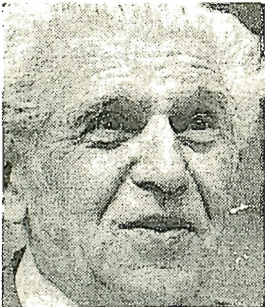


1893年(明治26年)9月17日、北米合衆国ペンシルヴァニア州ハリスバーグ市に生まれた。1912年同州ペンシルヴァニア・カレッジに入学し、1917年6月卒業、バチュラー・オブ・アーツの学位を受領した。同年9月、同州ケッチスバーグ市ルーテル派神学校に入学し、1920年5月卒業した。

大正9年(1920)9月、来日し、12月まで熊本市に居住した。次いで東京に移住し、大正11年9月まで日本語を研究した後、佐賀市に移り、大正15年まで同市にあってキリスト教伝道に従事したが、同年3月には熊本に移住した。そして同年5月より熊本県私立九州学院英語科を担当した。昭和2年6月24日、無試験検査により師範学校、中学校、高等女学校の英語教員資格を得た。昭和2年(1927)9月に帰米しペンシルヴァニア大学研究科に入学、同時にマウントエリー・ルーテル神学校に入学、1929年6月まで修業した。1928年6月ペンシルヴァニア大学研究科を卒業しマスター・オブ・アーツ受領。

さらに翌年、マウントエリー・ルーテル神学校よりバチュラー・オブ・アーツを受領した。その後、再び来熊、九州学院に復職。昭和12年4月1日より7月31日まで五高嘱託講師。週9時間。150円支給。

独国人 グライル Friedrich Karl Greil ドイツ語 1934. 4. 8~1934. 7. 31



1902年(明治35年)12月8日、ハルバーシュタットに生まれた。当地は低地ドイツ語と中部ドイツ語との境界地であったので、少年時代から正しい標準ドイツ語を学ぶことになった。3人兄弟で、兄ルドルフ(1900年生まれ)と弟オットー(1904年生まれ)がいた。将来画家になるつもりで、ドレスデン美術学校に入り、1920年3月、同校を卒業した。在学中より1927年頃までペン画家として活動したが、ベルリンとミュンヘンの美術館で見た写楽の役者絵に感動、浮世絵と歌舞伎の国に行きたくなった。それで1928年、スカンジナビア、フランス、スペイン及びモロッコに研究旅行をした後、同年(昭和3年)10月21日、来朝した。東京においてドイツ語を教えながら絵の勉強をしていたが、昭和8年2月より6月まで1学期間、北海道帝国大学予科でベッカー氏の代理としてドイツ語を教授した(これはグンデルトの紹介による)。

その後再び東京に戻り、芝区白金今里町覚林寺内に住んだ。昭和9年4月、第五高等学校の嘱託講師として採用され、帰国中のドル氏に代わり1学期間ドイツ語を教えた。週24時間、月手当金400円支給。教授期間は短かったけれど五高生たちに非常に人気があった。『龍南』第228号(昭和9年6月)に発表の「日本人と欧州人」Japaner und Europäerでは、日本人とヨーロッパ人は国民性が違うので理解し合うのは困難であるが、両者互に必要とし、相補って行か

ねばならぬと説いている。

昭和11年4月、日独医学協会嘱託として独語論文の訂正をしたり、ドイツ語講習会講師を務め、また、拓殖大学講師として1年間ドイツ語を教えた。

昭和12年NHKがドイツ語アナウンサーを募集したとき応募して、1年間の契約外人となった。以来、契約を更新しつつ、英文や日本語のニュースを独訳し、自ら週に一度、外国放送のアナウンスを担当した。スタジオで歴史の瞬間を感じたことが何回もある。「大本営陸海軍部発表、帝国陸海軍は本八日未明、西大平洋上において、米英軍と戦闘状態に入れり」太平洋戦争の開戦を告げるこのニュースを、„Laut der Bekanntgabe des Kaiserlichen Notquartiers Tokio ist heute früh den 8. Dezember japanische Armee und Marine gegenüber den Streitkräften der Vereinigten Staaten und Großbritannien im West-Pazifik in Kriegszustand getreten.“と独訳して、午前4時に読んだ。これは国内放送の午前7時より3時間も早かった。ドイツ語放送の仕事は昭和20年8月まで続いた（昭和13年一時帰国）。戦後は一時期休んだが、昭和28年再開、契約外人には定年がないので長期にわたり、ようやく昭和61年3月31日を以って引退した。なお、昭和25年4月1日より同52年3月31日まで一橋大学の外国人教師を、昭和25年4月1日より同42年3月31日まで千葉大学講師をそれぞれ務めドイツ語を教えた。表彰歴としては、勲四等瑞宝章（昭和44年）ついで勲四等旭日小綬章（昭和59年）を受けたほか、昭和59年5月、ドイツ語学文学振興会より桜井和市、高橋健二とともに感謝状を贈られた。現在、千葉県夷隅郡大原町小関谷10623番地の家に日本夫人（まさ子）と余生を送っている。〔追記〕グライルは平成15年1月6日、100歳を以て死去。

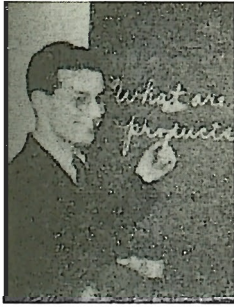
米国人 ベーアド James R. Baird 英語 1937. 9. 6～1939. 7. 31

1910年（明治43年）11月2日、アメリカ合衆国テネシー州のゼリコに生まれた。1923年6月、ノックスウィル公立学校卒業。1923年9月、ノックスウィル高等学校入学、1927年6月、同校卒業。同年9月テネシー大学入学、1931年6月同校卒業、バチュラー・オブ・アーツを受く。1933年9月テネシー大学の大学院において英語及び英文学を研究、同時に同大学英文科特待員となって其の間英作文を教授した。1935年6月マスター・オブ・アーツを受けた。1936年6月ハーバード大学に入学し、英文学研究に従った。

1935年9月以来、中等学校における教授法研究のため、ノックスウィル高等中学校の教師となったが、一方、テネシー大学において卒業後の研究を継続した。五高ではマーターの後任として、昭和12年9月1日より同14年7月31日まで外国人教師の身分で働い入れられた。

米国人 クラウダー Robert Harrison Crowder 英語 1939. 9. 1～1942. 7. 31

1911年（明治44年）8月14日生まれた。原籍北米合衆国イリノイ州ベサニー。ベサニー小学校を経て1929年ベサニー市区高等学校卒業。1929年ゼームス・ミリキン大学及びゼームス・ミリキン音楽学校に入学。1933年同校卒業、公立学校音楽教師免許状及びバチュラー・オブ・アーツの学位を受けた。1933年より1934年までイリノイ州チャールストン東部イリノイ師範学校に



在学した。一方、1931、1932、1933年の3回シカゴ大学夏期講習会に出席した。

職歴としては、1929年より1933年までイリノイ大学に在学中にデカターにある私立音楽演劇学校で教えた経験があるほか、1934年より1936年まで平陽外国学校において英語、地理、音楽を教授した。来日は1936年（昭和11年）で、東京で英会話・作文の私宅教授に従事する傍ら井上英語学校でも教えた。当時、東京市日本橋区通三丁目中將湯アパートに住んでいた。

昭和14年9月1日付で、ベアードの後任として五高に傭い入れられた。月俸350円。その後、昭和16年8月、契約をさらに2年延長したが、途中或る事情のため契約破棄となり、昭和17年3月31日を以って辞職した。